



ラーシュ・ペーテル・フェルダール

2008年4月～2008年6月

国籍：ノルウェー

道場：スニヤタ合気道道場

内弟子として所沢道場に二ヶ月以上滞在。彼は白帯でも立派な内弟子になれることを証明しました。ささやかなピアノコンサートを開き私たちを楽しませてくれました。

日本での二ヶ月間

ラーシュ・ペーテル・フェルダール

2008年4月10日に日本へ出発した時は、これからどんなことになるのか、知る由もありませんでした。わかっているのは、日本の東京近郊にある所沢道場に二ヶ月間滞在するのだということだけでした。おそらく厳しく、今までに全く経験したことのない生活になるであろうことは、わかっていました。果たしてその通りでした。

私はノルウェーのオスロのスニヤタ道場で、六段のモリコ先生の指導の下で一年半合気道の稽古をし、内弟子プログラムを開始した時はまだ四級でした。合気道を始めた時は、武道の経験は全くありませんでした。これからどうなるのだろうと少し不安に思ったことを認めざるをえません。日本の合気道家は本当に強く逞しいのだろうか。自分の指はどうなるのだろう。(ノルウェーに戻ってからはピアニストになるための勉強をしています) その時、私はこう考えたのです。OK、これから全く違った生活になるのだ、不服従のノルウェー気質は家に残し、ただ最善を尽くせばいい、全て上手くやれると思う他ないのだと。

多くの失敗をやらかすでしょうが、とにかく日本語の「ごめんなさい」を覚えてそれを使うのです。私はそれを頭に叩き込んで幾つかの場面で使いました。

二十六歳になって遂に合気道を発見したからには、自分自身のためにその「おおもと」を観に出来る限り日本へ行くべきだと心に決めました。皆さんの合気道に対する考え方は色々とその時々で変わって行くでしょう。ある人はそれを単に武道の一つであり、稽古の仕方なのだと思うでしょうし、又ある人は、武道の側面にはほとんど興味がなく、ただ稽古が好きという場合もあるでしょう。私が合気道を始めた理由は、たくさんあります。実を言うと護身術を学ぼうというのが、そもそもの動機でした。さらにはピアノの練習で酷使した手と上半身に深刻な問題を抱えていたので、体を緩め再び心地よいと感じられるようになる何かを期

待していたこともあります。合気道はそんな自分にぴったりであることが、すぐにわかりました。ただの初心者にすぎない私でも、合気道がどんなにその人の生活を変えることができるかすぐにわかりました。道場に入る時の態度を例にあげれば、それで言い尽せます。心を開いて笑顔で入れば、組んだ相手はその人の知っていることを勿論教えてくれますし、イライラして鬱憤を抱えて入ったとしても、組手は親友でもないのに、進んで一緒に稽古をしようとしてくれます。

スウェーデンの内弟子仲間のビヨンと私は、楽しみの理論というものを編み出しました。この理論はとても簡単でわかりやすいもので、厳しい生活を過ごす中で、私たちの助けとなりました。例えばあなたが何をしようとも、それを楽しむべきだということです。たったそれだけです。たとえば腰投げをされて、首から落ちてもし楽しみ、トイレ掃除も楽しむのです。死ぬほど疲れて、しかも休むことができない時さえ楽しみましょう。信じようが信じまいが、これが効くのです。トイレ掃除が楽しくなるなんて考えもしませんでした。実際そうなのです。

小林道場で内弟子として二ヶ月間過ごして本当に多くの経験をしたので、全てを言い尽す事はできません。道場の全ての方がとても親切でやさしく、皆さんには感謝の気持ちでいっぱいです。なにより小林先生です。先生は温かい雰囲気をもたらし、親しみやすさと寛大さで、すぐにくつろいだ気持ちにさせて下さいました。不安や恐れを忘れさせてくれ、私が知りうること以上のことを教えて下さいました。先生は全ての稽古は自分の為だけにしてくれているという印象を与えます。もちろんそんなことはなく、むしろ先生は道場にいる皆と直接に意思疎通ができ、多くの技を披露したり解説したりしなくても、皆に同時に何かを感じさせているのです。私は合気道の真の師範のもとで稽古ができる機会をもつことができ、有難く思います。

弘明先生が最初に私に入り身投げをしたことを覚えています。今思うとまるで飛んでいるようだったなと思います。先生はいつも稽古を様々な入り身投げから始めるのですが、それは身体の隅々まで温めるのに効果抜群でした。先生は又、英語を完璧に話され、日本語の苦手な私には有難かったです。ストックホルムとオスロでの先生の講習会に参加したのが、そもそも初めての国、日本へ来ようと思った理由で、本場の合気道をこの目で見なければと心に決めたのです。

毎週水曜日の朝、弘明先生の奥様



の実代子さんが内弟子たちに朝食を作ってくださいましたが、これも忘れられない経験です。私はレストランを出すべきだと言いましたが、彼女は本気にしなかったようです。それでも納豆（発酵した大豆）に関しては、いったい全体誰が美味しいと思うのか、どうも理解できません。美味しいとは思えません。スママセン。日本人ではないということですね。

山脇先生は孀恋にある彼の家と道場に連れて行って下さいました。その途中ローリングストーンズを聴きながら行ったのですが、先生はずっと口ずさんでいました。全ての歌詞を知っていました。スゴイ！先生はフランス語やフランス文化が専門です。私は日本の山々に囲まれた道場の中で、素晴らしい合気道の先生と一緒に腰をおろし、先生の話すフランス語を聴くという嘘みたいな経験をしました。先生の心のこもったもてなしには感服しました。ノルウェーから来た初心者の内弟子にすぎない私に、奥様の素晴らしい手料理、そして賓客のように先生のお宅に泊めていただきました。私は先生に合気道とは何かを尋ねましたが、先生は言葉を濁しました。山の空気と風景はノルウェーを思い出させます。ノルウェーには山々の中心に火山はありませんが。

滞在の最後の月に、私は体の痛みを和らげるために上野耕さんの指圧に定期的に通いました。この人はいとも簡単に奇跡を行います。日本を離れる前も西洋医学に対する信頼度は低いものでしたが、本当の指圧の効果を経験して、痛みを治すのは薬を飲むことではないと更にいっそう納得しました。

神田先生とその奥様は、私とビヨンさんを東京郊外の丘の上に建つ家へ連れて行って下さいました。小平からたった二時間のその場所は、日本がいかにも山の多い国かを証明していました。空気は清々しく、小さな温泉のハーブの香りが、三日間肌に残りました。夜は牛、豚、鳥、それにありとあらゆる野菜を料理し、もうこれのみこめないというくらい食べました。私たちはベランダで、日本の夜の物音に耳を傾けながらサントリーレッドを飲み、心ゆくまで楽しみました。

もう一つの思い出深い出来事は、翁先生の大祭で岩間の合気神社に出かけたことです。神道の儀式の後、屋外でビールとお酒を手に昼食を楽しみました。それは現実なのですが、ほとんど超現実的な雰囲気でした。合気道の師範が一同に会していることを想像してみてください。そこには「気」が満ちていました。

滞りも終わりに近づいた頃、私たちはGratis道場の二十五周年記念に参加しました。そこでも次々とお馳走尽くしの式典が続きました。通して三回パーティが続いたと思います。それにしてもノルウェー人からしてみると、日本人がパーティをきちんと構成することが、とても印象に残りました。きちんと決められた時間に開始し、手締めで一旦終了し、



凄いことにまたパーティが始まるのです。ですから飲み足りない人も心配はいりません。

数日後は、小林先生、五十嵐先生そして横田先生と山間での合宿に参加しました。私は再び五十嵐先生のもとで稽古をする機会を得ました。スカンジナビアで既に何度か稽古をしていただき、機会さえあれば続けていきたいと思えます。先生の稽古はよく転回や呼吸法など基本の技から始めます。先生は、私が未だに自分の腕を自然に上げられないことを気づかせて下さいます。それができるようになるのは誰にとっても長い

道のりだと思えます。

それにしても本当に合気道とは何なのでしょう。武道のひとつ？何か言える立場の私ではありませんが、武道ではあるのですが、一般的な武道とは違います。ほとんどの武道が、相手にできるだけ多くのダメージを与えようとするのに対して、合気道は全く違った考え方なのです。抵抗せず、腕力を使わずというのは、不思議です。攻撃したくない相手をどう導くのか。合気とは何か。宇宙と一体となるとはどんな感覚なのか。対する相手は、もはや敵ではなくなるのか。これらの問いは4級の私には、考えも及ばないことです。でもこのことが合気道において最も興味深いところなのです。全く内容を知らない一部の人たちからは一種のカルトと思われながら、こつこつと稽古をし、経験に基づく技を磨く人たちが、合気道には素晴らしい真実があるとわかるのです。私たちが追い求めてやまないことからわかると思えます。つまりこの部分では、私は合気道の何かがわかったと思っても、そのあとすぐ結局何もわかってないことがわかります。つまり忍耐を学ばねばならないということです。リンゴが熟して木から落ちたら、美味しいアップルパイを作り、私の友人たちにふるまうでしょう。ただリンゴの木に全てをまかせて待っているのではなく、水をやり、雑草を抜いたりすることが必要です。リンゴがいつ実をつけるのか、いつそれが始まるのか判断を下す真意は、全くわかりません。私は実際に起こる奇跡の単なる観察者にすぎません。

結局、合気道について考え過ぎることは、何の助けにもならず、何らはっきりとした答えは与えられないでしょう。それでも私の経験からすると、稽古をすればするほど、回答を求めなくなります。日々、自分の心がシンプルに軽くなっていくのを感じました。私は多くを問わないしそれ故、同じようにその答えも必要としなくなりました。小林道場のような場所で合気道の稽古をすることで十分、自分が必要なものは全て教えてくれるでしょう。道場長が何を考えているかを知るのは、気づいて

理解しようとするしかありません。理解しようとしなくても良いのです。自分にとってこれが大切だという信念をもって、稽古を続けることだけが重要です。時にはとても辛く、肉体的に厳しいでしょうが、そんな日々が最も集中力がいるときです。良い方法で辛い時期を乗り越えることは、安直な日々をだらだらと過ごすことより教えられることは多くあります。

最後に一つ。合気道の筋肉痛に効く薬は、より一層の稽古でしかありません。